

(別紙1)

論文の内容の要旨

論文題目：近年の北米心理学理論における死と宗教—宗教学・死生学の立場から

氏名：ムスリン イーリヤ

主題および目的

本論文は近年の北米心理学理論における死と宗教についての研究である。アメリカ合衆国を中心に、主として、ここ30年あまりの間に北米心理学においてなされた死と宗教の関係に関する学術研究を対象とする。より具体的には、米国などの宗教心理学者の間で、宗教の成立過程における死の位置や、死関連の信仰が宗教の存続と維持において果たす役割などがどのように検討されてきたのかを分析することを目的としている。

その際、近年の北米心理学の宗教理論における宗教の捉え方や宗教における死の位置付けを整理・分析しながら、これらの研究が抱える問題を指摘し、各理論及び死と宗教に関する北米心理学の全般的な研究動向における課題と展望を提示したい。こうした本論文の課題は、宗教学全般のみならず、現在日本で体系化が進む死生学をも念頭に置いたものである。

本研究の対象

本論文で「近年」とは1980年代初頭以降の時代を指す。この時代区分を選んだ理由は、1980年代初頭から1990年代初頭にかけて、恐怖管理理論、宗教の合理的選択理論、宗教の愛着理論、進化心理学による宗教論など、現在においても研究が進展する幅広い体系的な宗教理論や理論的枠組みが複数登場したという事実による。

本論文が扱うのは、上述の諸理論に加え、恐怖管理理論への反発がその発足の基礎となった意味管理理論を合わせた、5つの理論である。理論の選択の基準として、最近に至っても活発な研究活動の中で死関連の問題を取り上げ、宗教研究に大きな影響を与えている理論であること、論争あるいは相互補完という形で互いに関係していること、また最近の北米における宗教心理学研究の全体像を把握する上で欠かせない理論的視点であり、その研究の方法・対象・動向の多様性と幅広さを示すために有用な理論であることが挙げられる。

したがって本論文は、最近の北米心理学におけるすべての宗教理論を扱うものではない。だが議論を進める上で、精神分析学や実存心理学、進化論の流れを汲み、それらを導入、適応させながらも様々に発展させてきた、社会・人格・発達心理学といった心理学の亜分野を跨ぐ幅広い理論を考察し、個人と社会、意識と無意識、情緒と認知を対象とする多彩な諸研究も視野に入れる。

さらに、本論文で取り上げる理論には、進化心理学と愛着理論のように、特定の宗教の真偽に関する発言は行わず、宗教全般を客観的な心理的・社会的現象として扱いながら、宗教以外の原因によって説明を行うといった、方法論的な無神論の立場をとる理論が含まれる。反面、

R.スターク等による宗教の合理的選択理論、P.T.P.ウォングによる意味管理理論のような部分的に自らの宗教的信念を反映させた理論も含まれる。

このような対象の広範性と包括性のほか、扱う理論の斬新性と時宜性にも本論文の意義がある。死に関する諸宗教の信仰を総合した著作、また死の不安と宗教信仰を計量的に捉えた心理学研究の概要や研究史に取り組んだ短い論稿は存在するものの、米国ないし北米心理学理論における宗教と死の関係についての議論に焦点を当てた包括的な研究はこれまでほとんどなされていない。本論文は、先行研究におけるこうした空白を埋める作業としても、宗教研究に対するひとつの貢献をなすものとして位置付けられよう。

本研究のアプローチ

以上述べた主題と課題に基づき、死の不安・恐怖、またより広く、死に対する態度の多面性を指摘する心理学研究を念頭に置く本研究が依拠するのは、死関連の心理的・社会的現象の複雑性を意識する死生学的な立場であり、宗教の多様性や複雑性を特に意識し、研究者の宗教概念を問いながら自文化中心的な態度とは距離を置く宗教学的なアプローチである。宗教学者 M.ハミルトンが述べるように、宗教研究において論者が自らの理論的な嗜好や個人的な意図と目標を必ずしも排除できないことは、常に留意しておく必要がある。論者の多くは、宗教を定義し、宗教研究の対象を定めるに当たって、単に対象の境界を決めようとするのみならず、定義の選択によって自らの宗教の捉え方を正当化しようとする。つまり、自分の都合に合った宗教定義・概念を採用することで、自身の理論が扱い切れない事象を恣意的に研究対象から除外する、もしくは、自らの理論的立場に不可欠となり得る現象を意図的に研究対象の中に導入することがしばしば見られる(Hamilton, M., *The Sociology of Religion*, London and New York: Routledge, 2001, p. 13)。

死の恐怖・不安など、死に対する態度について、本論文では、その多面性や複雑性、具体的な文脈・状況による可変性を指摘する立場を下敷きにする。死の恐怖を扱ったM.ミクルニサーとV.フロリアンは、死の恐怖を自己死、大切な他者の死、そして死後待ち受ける運命に対する恐怖という三つの次元の現象として捉え、それぞれ内面的、対人的、超個人的な次元からなる「死の恐怖の多次元モデル」として提示した(Mikulnicer, M. and Florian, V., *The Complex and Multifaceted Nature of the Fear of Personal Death: The Multidimensional Model of Victor Florian*. In Tomer, A., Eliason, G. T. and P. T. P. Wong (eds.), *Existential and Spiritual Issues in Death Attitudes* (pp.39-64), New York: Lawrence Erlbaum Associates, 2008)。またタナトロジストのR.カステンバウムは、死の心理の動態性を指摘しつつ、死の不安及び死の観念の推移の原因として、年齢と共に積み重なる経験、また理性と信仰、論理と欲望、現実と理想などといった内面的な対立に言及する。そして、死の不安の不在あるいは遍在を想定して、包括的な大理論を求めるよりも、どのような条件の中でどのようなタイプの死の不安が現れ、その不安のどれくらいの程度がどういった結果を招くかというような具体的な状況と文脈を重視するアプローチを勧めた(Kastenbaum R., *The Psychology of Death*, London: Free Association Books, 2000)。

このような議論を踏まえ、本研究では、北米心理学理論における死の捉え方について、死生学的なアプローチに拠りながら、次の3つの観点から考察した。1. 死を(生物的、心理的、社会的、経済的な)複雑で多面的な現象として考え、死の恐怖・不安を広義に、内面的・対人的・超個人的次元を含む多次元的な現象として捉える。2. 個人の死に対する見方や態度は、社会的環境と時代的思潮及びその個人の経験や状況によって形成されるものであり、かつ生涯において可変的、動態的なものであるとする。3. 死の恐怖と宗教信念の間に定まった一方向的な相関関係が存在しない。

本論文の内容と結果

第1章では、本論の準備作業として、19世紀終盤から1970年代までについて、アメリカ合衆国を中心に、北米心理学、特に宗教心理学における死の捉え方を通時的に紹介し、死または死と宗教の関係に関してどのような問題提起が行われてきたかを概観、分析する。続く第2章から第6章までは、新しい理論が複数登場した1980年代から現在に至るまでの北米心理学における、宗教と死を扱った5つの理論を章ごとに検討した。理論それぞれの宗教概念と死の捉え方、理論間の論争を中心に、各理論の研究の動向と成果を批判的に分析している。そして最終第7章は、近年の北米心理学理論における死と宗教の研究全体における動向と実態、その長所と問題点について総括した本研究の結論と評価である。

以上のような各章の検討から導かれる結論を簡潔に述べるならば次のようになる。近年の北米心理学による宗教ないし宗教における死に関する研究は、非常に多様な論理的な視点と研究方法、そして極めて幅広い対象を有しており、膨大な超域的な知識を重ねながら、心理学の分野に留まらない学術的な貢献を提示する。だが、宗教と死の問題に関して、今後の課題や将来的な見通しを考えるならば、幾つかの観点でさらなる検討が求められる。宗教信仰や実践の多様性をより強く意識し、自文化・自宗教中心的な宗教概念を避けること。自らの立場のイデオロギー性をより自覚し、宗教理論を提示する際には、主観的な宗教的・政治的な嗜好を可能な限り排除し、他学派の見解や指摘に十分配慮すること。信者の死に対する態度について論じる場合、死と人間の動機付けに関する一般論に還元することなく、可能な限り心理学的な実証研究を参照するとともに、自らの主張と異なる成果を提示する調査を真摯に受け入れながら説得力ある反証、反論を行うこと。死への不安・恐怖、死体や死者に対する認知的な反応、あるいは大切な他者との分離とその悲嘆といった、ひとつの死または死に対する態度がもつ複層的な次元を捉え、単一的に限定されない、死の問題の多面性を常に意識したより包括的なアプローチを採用すること。そして最後に、宗教全般についての包括的な説明を目指すにあたっては、単一の理論のみの限界を乗り越えるために、認知と進化を重視する視点を備え、個人の経験や情緒、意味を重んじる他理論とのさらなる連合・協働が求められるであろう。